

機関番号：12101  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19520325  
 研究課題名（和文） 一致現象と等位構造の文法化の形態統語論的研究  
 研究課題名（英文） A morphosyntactic study on grammaticalization of coordination and agreement  
 研究代表者  
 西山 國雄 (NISHIYAMA KUNIO)  
 茨城大学・人文学部・准教授  
 研究者番号：70302320

## 研究成果の概要（和文）：

一致現象と等位構造について、文法化の観点から2つを関連づける研究を行った。ラマホロト語では等位構造内での一致現象が存在するが、これを主語と目的語の格の有標性の違いにより分析した。また通言語的に観察される随伴語から等位語への文法化については、統語的にはこの変化は決定詞句から等位句へのラベルの変化と分析し、等位現象は統語論の他にも、形態論、意味論の観点から分解されると提案した。

## 研究成果の概要（英文）：

This research investigates agreement and coordination in connection with grammaticalization. Lamaholot has agreement within coordination, which is analyzed in terms of the difference of markedness of case in the subject and the object. As for the development from the comitative to the conjunction observed cross-linguistically, it is captured as change of labels from DP to &P. Coordination is decomposed into several factors, namely syntax, morphology and semantics.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：文法化、等位構造、ラマホロト語、一致現象、統語論、形態論

## 1. 研究開始当初の背景

一致現象についての理論的説明は1980年代以降、様々な変遷を経ていて、特にここ数年間の理論言語学で中心的な地位を占めている。しかしながら、一致現象が生成文法で注目さ

れる以前、機能主義言語学の分野ではGivón (1976)が、一致現象は代名詞から発生してきたと提案している。例えばバント語族の目的語の一致を、英語の単語を使って言えば、もともとはJohn, I like himという話題文において、

代名詞が接辞化してJohn, I like'mとなり、しまいには話題化されない普通の目的語にもこれが拡大して、I like'm Johnとなり、'mの部分が目的語の一致とみなされる。従来こうした文法化の説明は、理論言語学とは馴染まないと考えられてきたが、最近になり、Roberts and Roussou (2003)やFuß (2005)によって、文法化に理論的説明が与えられてきている。

一方等位構造においては、Mithun (1988)が、付随語 (comitative, 英語の with に相当) が等位語 (英語の and に相当) に発達する過程が自然言語にあると提案した。つまり、A with B を表す表現が A and B の意味を持つようになり、しまいにはその「つなぎ語」が名詞以外の動詞や文も繋げられるようになったというのである。これは日本語の例を考えても納得できる。「と」は、「私は彼と行く」や「私と彼は行く」のように、付随語と等位語の両方に使えるが、動詞や文は繋げられない。この点で「と」はこの文法化の過程の中間点に位置すると言える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、一致現象 (agreement) と等位構造の文法化の形態統語論的研究を行うことである。一致現象と等位構造は、共に最近理論言語学分野で注目されている項目であり、これらには文法化 (grammaticalization) が関わっていると言われている。これら2つを関連づける研究はいまだに存在しないが、東インドネシアのラマホロト (Lamaholot) 語では等位構造内での一致現象が存在し、これの研究を進めることで、一致現象と等位構造の文法化の統一的な理論的説明が可能になってくる。

## 3. 研究の方法

本研究の活動形態は、文献を読むこと、データの収集、新たな説明の構築、その発表の4つから成る。文献を読む目的は、言語理論の先行研究をふまえて、視点を広げ、多くの可能性を考慮できるようにすることである。データ収集は、文献によるものと、フィールドワークによるものがある。ラマホロト語の更なるデータ収集はインフォーマントのからの聞き取り調査が必要となる。成果の発表には、国内と海外の両方を考えている。

研究内容の具体的項目は、大きく分けて以下の5点から成る。

- 1 一般言語の等位構造の先行研究に精通し、ラマホロト語および日本語を基に独自の視点を得る。
- 2 一般言語の一致現象の先行研究に精通し、ラマホロト語を基に独自の視点を得る。
- 3 ラマホロト語の等位構造内の一一致現象の分析を進める。
- 4 一般言語における文法化理論の先行研究に精通し、ラマホロト語および日本語を基に独自の視点を得る。
- 5 以上の見地を総合して、独自の統一的な文法化理論を構築する。

## 4. 研究成果

関連する論文は何本かあるが、本研究の成果を直接的に発表したのは、掲載論文の①と③ (Journal of Linguistics, English Linguistics) である。

Journal of Linguistics に掲載した論文では、ラマホロト語の等位構造における一致現象の記述と理論的分析を行った。この言語では、第1等位語と等位接続語が一致を示す。この一致は主語位置では義務的だが、目的語の位置では随意的である。この分析は格の有標性により行われ、主語の主格は無標だが、目的語の対格は有標であることが、この差を生むとしている。具体的提案としては、無標の格のみがファイ (人称、性、数) 素性が一致のホストに複製されることを可能にする、と分析している。見かけ上の随意性は、等位構造での格の広がり方の問題に帰すことができる。等位構造における一致現象はラマホロト語の他にもニューギニアのワルマン語でも観察されるが、この2つの言語の比較も行った。結論として、文法化の度合いは前者の方が進んでいることがわかった。

English Linguistics に掲載した論文では、ラマホロト語を含め通言語的に観察される随伴語 ('with') から等位語 ('and') への文法化を分析した。統語的には、この変化は決定詞句 (DP) から等位句 (&P) へのラベルの変化と捉えられる。等位現象は統語論の他にも、形態論、意味論の観点から分解され、この分析から、この中の一部だけが随伴語から等位

語への変化した例があるはずだ、という予測が成り立つ。この予測は正しいことを、幾つかの言語の例により示した。この意義としては、言語変化は一方向ではなく多方向だということである。

以上の2論文は出版されたばかりなので国内外で明確なインパクトはまだない。しかしこのテーマが注目されている証左として、海外の学術雑誌から、似たようなテーマの論文の査読を依頼された。また今後の展望として、この研究から発展した研究テーマが、平成23年度～平成26年度科学研究費(基盤研究(C))「文法化における機能範疇の出現方法の分類と統合に向けての研究」として採択された。現在まで機能範疇の出現方法に関して3通りのモデルが提案されていて、その中には一般原理から制約される部分もあるが、まだ制約がない(少ない)部分も多い。またこれら3つの関係についても、明確な研究がされていない。この新研究では、3つはそれぞれどんな適用範囲をもつのか、果たして全部必要なのか、もし統合できるとすればどんな方向が可能か、などの視点から、より制限的な機能範疇の出現方法を構築することをめざす。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 西山國雄、Conjunctive agreement in Lamaholot, *Journal of Linguistics*, DOI: 10.1017/S0022226710000356, 2010. (査読有、電子版で公開済、2011年出版予定)
- ② 西山國雄、Introduction: Functional categories, directionality, and gradualness in syntactic change, *English Linguistics* 27.2, 364–373, 2010. (査読有)
- ③ 西山國雄、Relabelling and multi-directionality in the development of coordination. *English Linguistics* 27.2, 364–373, 2010. (査読有)
- ④ 西山國雄、Syntax within the word: Economy, allomorphy, and argument selection in Distributed Morphology, *English Linguistics* 27.2, 492–502, 2010. (査読有)

- ⑤ 西山國雄、Penultimate accent in Japanese predicates and the verb-noun distinction, *Lingua* 120, 2353–2366, 2010. (査読有)
- ⑥ 西山國雄、A Review of Anna Maria Di Sciullo, *Asymmetry in Morphology, Studies in English Literature* 50, 255–263, 2009. (査読有)
- ⑦ 西山國雄、V-V Compounds, *Handbook of Japanese Linguistics*, ed., by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, Oxford University Press, 320–347, 2008. (査読有)
- ⑧ 西山國雄、Japanese Object Honorification and the Nature of Agreement, 金子義明他編, 『言語研究の現在』, 344–352, 開拓社, 2008. (査読無)
- ⑨ 西山國雄、Approaches to Morphology, 上智大学言語学会会報 22, 119–129, 2008. (査読無)

[学会発表] (計9件)

- ① 西山國雄、「Auxiliaries and Evidentiality in Lamaholot, with Reference to Muna」(研究発表)、TAM and Evidentiality in Indonesian Languages、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所(東京)、2011年2月18日。
- ② 西山國雄、「連体形の形態統語構造と歴史的変遷」(招待講演)、慶応コロキウム、慶応大学言語文化研究所(東京)、2010年3月26日。
- ③ 西山國雄、「Remarkable Agreement in Lamaholot: Its Typology, Development, and Constraints」(研究発表)、インドネシア諸語の研究会 2009年第1回研究会、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所(東京)、2009年9月12日。
- ④ 西山國雄、「Penultimate accent in Japanese predicates and the verb-noun distinction」(研究発表)、Phonology Forum 2009、神戸大学(神戸)、2009年8月24日。
- ⑤ 西山國雄、小川芳樹「A Unified Syntactic Analysis of Atransitivity in Japanese V-V Compounds and English Particle Constructions」(研究発表)、Morphology and Lexicon Forum 2009、東北大学(仙台)、2009年7月4日。

- ⑥ 西山國雄、「Penultimate accent in Japanese predicates and the verb-noun distinction」(研究発表)、Morphology and Lexicon Forum 2009、東北大学(仙台)、2009年7月4日。
- ⑦ 西山國雄、「節の名詞化としての連体形—共時的分析及び通時的分析—」(研究発表)、日本語学会第138回大会ワークショップ『古代日本語の形態・統語的变化—名詞化活用形の変遷とその統語的帰結』、神田外語大学(千葉)、2009年6月20日。
- ⑧ 西山國雄、「付随構造から等位構造へ」(研究発表)、日本英文学会第81回大会シンポジウム『統語変化』(企画者)、東京大学駒場(東京)、2009年5月30日。
- ⑨ 西山國雄、小川芳樹「Atransitivity in V-V Compounds, Prefixed Verbs, and Verb-Particle Constructions」(研究発表)、Lexicon Study Circle、東京大学駒場(東京)、2009年5月16日。

[図書] (計2件)

- ① 西山國雄、ベレ出版、『日本語の教科書』、畠山雄二(編)、2009、276-335。
- ② 西山國雄、Herman Kelen *A Grammar of Lamaholot, Eastern Indonesia: The Morphology and Syntax of the Lewoingu Dialect*, Lincom Europa, Muenchen. 2007, 180 pages.

[その他]

ホームページ等

<http://info.ibaraki.ac.jp/scripts/websearch/index.htm>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西山國雄 (NISHIYAMA KUNIO)

茨城大学人文学部准教授

研究者番号：70302320